

学科・専攻名

生活造形学科

教育課程・学習成果の検証

1. 学科・専攻の「開講科目数（必修・選択必修・その他）」「非常勤講師比率」「学生の入学から卒業までの平均受講科目数」等のデータを参考に、学生の受講科目数に対して開講科目数は適切か、非常勤講師比率は適切か、学生にとって体系的な科目編成となっているか等を検証

【検証結果（全体概要）】

受講科目数に対して開講科目数が適切かという点に関して、2019 年度開講科目数は、選択 151 科目、必修科目 48、それに対し学生の履修状況は、2017-2019 平均受講科目数が 73.6 科目となっている。この開講科目と履修状況の関係から数字上、履修率が低くなっているが、それは以下の理由によるものである。

①選択科目が多い理由としては、本学科が造形意匠（デザイン）、アパレル造形、空間造形の 3 つの部門から構成されているからである。各部門は、それぞれに学問領域に特化した科目が必要であり、部門ごとに必要最低限の科目数に絞り込んで開講しているので、これ以上の科目削減は難しい状況にある。

②必修科目 48 科目のうち、42 科目は、本学科教員全員の 14 名が、3 回生 4 回生を対象に 3 科目の卒業研究に関わる演習科目を開講しているためであり、科目の種類としては 7 科目が必修となっている。

本学科の非常勤講師比率に関しては、2017 年度が 32.82%、2018 年度が 28.84%、2019 年度が 24.33 % であり、3 年連続で非常勤講師削減率において改善傾向が確認できる。

専門科目は、各科目の連携を図った体系的な科目編成として、以下のような体系づけをおこなっている。1 年次では、生活造形の基礎を学ぶと共にデザイン、アパレル、空間など 3 領域に関する基礎的知識を身につける。また、演習・実習で、専門の学びを進める。1 回生前期の必修科目である生活造形基礎演習は、アカデミック・スキルを身につけるための初年次教育を少人数クラスで実施している。2 年次では、発展的講義で各専門領域の学びを深める。また、各自の興味に応じ、演習・実習での学びを通して、主体的に調査し考える力を養う。3 年次では、発展的講義で各専門領域の学びをさらに深めていく。後期にはゼミ単位に分かれて専門演習をおこない、主体的に調査し、批判的・合理的に考える力を養うとともに、課題発見力や課題解決力を身につけ、表現能力・対話能力も高めていく。4 年次では、1 つの分野に絞って一段と専門性の高い知識・技能を身につけるとともに、指導教員の個別指導のもと 4 年間の学修を総合して卒業研究を完成させ、生涯にわたって学び続ける能力の確立を目指す。

なお、学科の全科目について、学位授与の方針に基づき(1)知識・理解、(2)汎用的技術、(3)思考・判断、(4)対話・相互理解、(5)社会性・自律性、(6)自立性の 6 つ能力に関与する程度を示すことで、教育課程が体系的に編成されていることを、わかり易く簡略化したカリキュラムマップを作成し明示している。

【成果および向上施策】 ※無い場合は「特筆すべき事項なし」と記入。

本学科の非常勤率は、2019 年度、24.33 % となり、2017 年度が 32.82%、2018 年度が 28.84% であったことから、非常勤講師削減推進の成果が確認できる。

【課題および改善施策】 ※無い場合は「特筆すべき事項なし」と記入。

特筆すべき事項なし

2. 「卒業時アンケート」「PROG（ジェネリックスキルテスト）結果」「学修行動比較調査」「進路・就職状況」「免許・資格取得状況」「休学・退学・留年数」「授業アンケート結果」等のデータを参考に、学科・専攻の教育について、効果が挙げられている点、改善すべき点を検証

【検証結果（全体概要）】

2018年度と2019年度の授業アンケート結果を、前期・後期の講義演習科目・実験実習科目と、それぞれ比較してみると、大きな変化は見られないものの、講義演習科目、実験実習科目、いずれも、質問項目02「私はシラバスを読んで役立てた。」と、質問項目03「授業時間外に、課題やレポート作成、試験の準備等を含めてこの科目の学習に1週あたり平均どれくらいの時間を費やしましたか。」において、2019年度の方が0.2ポイント高くなっている。

このことから、昨年度の教員の資質向上の取り組みの中で課題となっていたシラバス活用に関しての問題が改善されたこと、学生の授業外での学習時間の増加を促す施策や学生のモディベーション向上を図る努力が成果となって表れたことが分かる。

【成果および向上施策】 ※無い場合は「特筆すべき事項なし」と記入。

学生のシラバス活用の向上と授業外での学習時間の増加が認められた。

【課題および改善施策】 ※無い場合は「特筆すべき事項なし」と記入。

特筆すべき事項なし

3. 学科・専攻として、教育の質向上・改善に向けた組織的な取り組み（FD）をおこなっているか。おこなっている場合、それはどのような内容か、どのような課題認識に基づくものか。

【検証結果（全体概要）】

毎年、卒業研究の成果報告の場として、11月初旬に卒業研究中間発表会、2月上旬に卒業研究発表会および作品展示を行ない、教員全員が参加している。これらの行事は卒業研究の評価の場であるとともに、卒業研究に取り組む学生のモディベーションの向上に役立っていることは自明のことであるが、一方で、学生の発表は卒業研究指導を反映するものであり、その点においては、教員が卒業研究指導の方法を互いに参考にし合い学ぶ場となっている。そこで、本学科では、卒業研究に関連するこれらの行事を卒業研究指導の質の向上を図る取り組みと位置づけている。本学科は、造形意匠（デザイン）、アパレル造形、空間造形の3つの部門から構成されていることから、卒業研究は、その多様性が特徴であるものの、研究分野や研究手法が大きく異なる教員同士は、卒業研究指導において、お互い無関心になりがちである。しかし、人間の生活に関わることを対象とするという点において共通性を持つ研究を指導するわけであるから、各教員は、分野・領域を超えて、お互いの卒業研究指導を学ぶことで、その質の向上・改善を図るべきであるという共通認識を持っている。

教育活動（授業の分かりやすさ、履修指導等）に対する学生の満足度については、「授業アンケート」を基に、学科会議で検証し意見交換を行っており、2019年度は、教員の授業への工夫、話し方などが授業の満足度に大きく関係していることがわかり、教員の努力、学科の努力が評価されていること、令和元年から生活造形学科の定員が、100人から120人に増加しているため、一人一人への配慮がこれまで以上に求められること、今後は、学生の人数がますます増えるので、教員全体で協力して授業内容を充実させていく必要があるということを確認した。

【成果および向上施策】 ※無い場合は「特筆すべき事項なし」と記入。

特筆すべき事項なし

【課題および改善施策】 ※無い場合は「特筆すべき事項なし」と記入。

特筆すべき事項なし

4. 教員組織の編成（採用・昇任等）にあたって、職位構成および年齢構成のバランスに配慮した編成をおこなっているか。また、カリキュラムに基づく教員組織となっているか。

【検証結果（全体概要）】

2020年8月現在、14人の教員によって編成され、職階は教授9人、准教授5人となっており、学科共通基礎科目と各専門分野の専門科目、資格取得のための科目を提供するために必要な専門知識・経験を備えた教員を配置し、全教員が大学院を兼任できるレベルである。男女の内訳は男性7名、女性7名と、バランスのとれた構成である。なお、職階の内訳としては、造形意匠（デザイン）分野は教授1名・准教授3名、アパレル造形分野は教授4名、准教授1名、空間造形分野は教授4名、准教授1名である。

また、本学科では、毎年度実施する自己点検・評価の他、カリキュラム検討等に合わせて教員組織の適切性について点検・評価をおこなっている。その結果をもとに、必要に応じて、学科会議で公募採用人事案を策定し、全学の人事委員会にて提案している。2019年度は、2020年3月の教授（契約）1名の定年退職に伴う2020年4月就任の教授1名の採用人事を行った。また、1名の教員に対し2020年4月准教授から教授への昇格の人事を行った。

【成果および向上施策】 ※無い場合は「特筆すべき事項なし」と記入。

特筆すべき事項なし

【課題および改善施策】 ※無い場合は「特筆すべき事項なし」と記入。

特筆すべき事項なし